

アジアの国連加盟国のうちもっとも後進的で、しかも国民1人当たりのアメリカ援助をもっとも多く享受している国、全人口わずか300万余、国会議事堂の前庭で黄牛がのんびりと草をはみ、政府の総合庁舎は東京の区役所よりも小規模で、共産主義と自由主義とははなばなしい前哨戦でもないかぎり忘れられてしまいそうな国、それがインドシナの山奥にあって「100万頭の象と白いパラソルの国」といわれるラオス王国である。

さて去る6月3日、この100

万頭の象の國の新首相として登場したチャオ・ソムサニットとはどんな人物かを論ずるに先だって、まずかれを登場せしめるに至ったラオスの最近の政治的背景を素描することが重要のように思われる。

1954年ジュネーブ協定によりインドシナ内乱は休戦の終止符が打たれた。これにより共産圏の尖兵といわれるパテト・ラオ（自由ラオス）は、中共・ヴェトナムに国境を接する北部2州を占拠したが、当時の首相スバナ・ブーマ殿下の忍耐強い努力と、一方パテト・ラオ側の戦術転換のせいもあって、1957年11月、パテト・ラオの最高指導者ボン・スパスボン殿下（首相の異母弟で夫人はヴェトナム人）ほか1名の入閣を条件に南北統合すなわち国家統一が決定した。行政面での合体は比較的波乱なく行なわれたが、いざ実施段階となって軍の編入とくに将校下士官の差別待遇が問題となり軍の統合はデッドロックに乗り上げてしまった。そして1年後いよいよ了解なって編入式挙行というその当日、2カ所のうち一方の集結軍は反旗をひるがえしてジャングルの奥深く逃亡してしまっただのである。これを契機にヴェトナム軍の国境侵犯が世界の話題をにぎわし、ついに国連は元駐タイ日本大使沢沢信一氏を团长とする侵犯に関する現地調査団派遣となったが、侵犯の事実はいくつかの把握できなかったといわれる。

一方ブーマ内閣はすでに瓦解し、3カ月にわたる政治空白ののちブイ・サナニコン内閣が政権の座についた。わずか9名の議員しかもたぬ独立党領袖サナニコン首相は多数党たる進歩党の協力をえてきわめて強力内閣の親があった。1958年4月の補助選挙の結果、パテト・ラオ（ネオ・ラオハタサット党と改名）の進出きわめて目ざましく、国内に一種の不安を醸成しはじめたので、厳正平和中立堅持という前内閣の政策を踏襲したもの、サナニコン内閣は全面的にアメリカ一辺倒となり、共産分子の徹底的な弾圧にのりだした。ところが1955年から始まったアメリカの経済援助にからんで歴代内閣の浪費・不正使用に対する弾劾の声が高まり、既成老朽腐敗政治の刷新と真に国民のためのアメリカ援助資金使用をと呼んで、少壮政治家官吏などを中核とする「国家権益擁護委員会」が結成された。

ラオス首相

チャオ・ソムサニット



Tiao Somsanith

1958年12月、サナニコン首相は複雑な国内情勢に対処するため向こう1年間の独裁権を握ったが、1カ年の時間切れが迫った59年12月、さらに1年間の独裁権延長問題と、翌年4月に予定される選挙問題をめぐって国家権益擁護委員会の激しい反対闘争が展開され、ついにサナニコン首相は内閣の大改造を断行した。そこで国家権益擁護委員会は軍部と手を握り無血クーデターを敢行して一時的に軍政をした。越えて1月早々、最高長老格で王室諮問会議議長クイ・ア

バイを首班とするいわば選管内閣が誕生し、4月の総選挙は国家権益擁護委員会が結成した社会民主党(Paxasankhom)党が、下院59議席中32議席を獲得して勝利を勝ちえた。ところが去る5月23日、國家の安全を脅かすものとして逮捕投獄中であったパテト・ラオの党首スパスボン殿下が他の指導者15名とともに集団脱獄・逃亡するという大事件が突発した。5月30日アバイ内閣は総辞職。そこで国防大臣であり同時に社会民主党総裁のプミイ・ノサバン将軍が後継内閣の首班に擬せられたが、極右翼である同将軍はラオスにおける今後の平和維持にむしろマイナスになるのではないかと懸念が米・英・仏・日など現地大使間にも強く、ふたたび内乱の火つけ役になることをおそれて6月3日、社会民主党副総裁で内務大臣のチャオ・ソムサニットに大命が降下するに至った。新内閣は閣僚10名、國務次官4名で成立したが、旧与党の保守系からはわずか1名、無所属2名計3名が参加したにすぎない。

さてこのように目まぐるしい政変のなかから、しかもハノイに自由ラオス臨時政府を樹立して対抗しようとする共産勢力の脅威のもとで国政を背負って立ったチャオ・ソムサニットとはいかなる人物であろうか、かれは決してこぶしをふりあげ獅子吼するような人物ではない。はえぬきの内務畑出身、ここ5カ年間歴代内閣の内務大臣や次官の重責をはたし、国内治安に関しては比類ない手腕家といわれる。筆者もラオスに勤務していたころ2度ほど面談の機会をえたが、容顔から受ける感じはいかにも剛悍であるが、うちにはヒューマニズム精神があふれ、思考が緻密で寡黙断行型の、とにかく1本バックボーンが通った人物である。キャリアーが示す通りの廉潔の士で、援助の施主たるアメリカのひんしゅくを買うようなスキャンダルなど絶対に起こすことはないであろう。そして従来の政府と違って國家建設のためには社会民主的な政策をうちだすであろうが、それも自由陣営とくにアメリカとの連係を弱めたり岐をきたすような方向とはとらないであろう。平均年齢40歳にみたないこの若い内閣の若い首班に対する国民の期待は大きいし、火山上の悲劇者とならぬことを願ってやまない。（所員 永田逸三郎）